ティーチング・ステートメント

所属 公衆衛生看護学専攻科
名前 水野 芳子
作成日 2024 年 2 月 26 日

【責任】
公衆衛生看護学専攻科に所属し、公衆衛生看護に関する教育・研究活動及び看護学科において教育・研究活動を行っている。主たる教育活動は、公衆衛生看護学専攻科において保健師養成に必要な科目（地域看護診断・演習、健康教育論・演習、健康課題別活動論、保健医療福祉行政論、疫学Ⅱ、公衆衛生看護管理論、実践的研究演習、公衆衛生看護学実習、継続支援実習など）、看護学科における科目（地域・在宅看護学概論、保健医療福祉論など）、学部及び専攻科のゼミ生の研究支援である。 特に、専攻科においては学生の生活・学習にかかる全般的なサポートや国家試験対策を行うとともに、広報活動にも力を入れている。

【理念】
学生には、科学的エビデンスに基づく保健活動を実践し、健康的な地域づくり活動を展開できる保健師になってほしい。様々な職種が地域で活動する時代であり、「保健師」としての専門性が見えにくくなっている。看護の知識を基盤として、しっかりとした個別支援から、地域を診て、動かすことのできる保健師が求められている。さらに保健師は、既存の資源をコーディネートするのみではなく、対象者及び地域のあるべき姿を想像し、社会資源を創造していくことが求められてる。また、近年頻発している大規模災害や感染症などの健康危機において、最前線で活動することが求められている。既存の制度や資源に囚われず、想定外の事態においても、保健師として自分で考えて行動できる専門職としての自覚と責任を持つ人材に成長してほしい。

【方針・方法】 上記の理念を実現するために、「基礎的な知識・技術に基づく専門能力」、「住民と協働して活動できる実践力」、「柔軟で発展的な思考力」を促す方針で教育している。

方針１「基礎的な知識・技術に基づく専門能力」

- 授業では、法律や制度の改訂に応じて常に最新の情報に基づく授業を展開し、社会情勢を踏まえ変化する活動について教授し、単なる暗記ではなく、自分の生活に位置付けて考えられるよう教授している。
- 毎回の授業の最後には、重要事項をまとめ振り返る時間を設けたり、小テストを実施し、授業の復習と知識の定着を図っている。
- 学部時代に学んできた目の前の患者を対象とする看護と異なり、実体のない地域を対象とするという抽象的な活動について、具体的な事例を用いてイメージができるように説明している。
- 実習では、学生の学びが深められるよう実習指導者と調整し実習プログラムを作成している。
- 学生へのフィードバックでは、根拠をしっかりと示すようにしている。

方針２「住民と協働して活動できる実践力」

- 自分の考えをまとめ話すことに慣れるよう、発言の機会やプレゼンテーションの機会を多く作っている。
- グループワークやカンファレンスでは、会議運営やグループ運営を実践的に学ぶ機会を設定している。
- 学生の主体的な行動を大切にし、自立して行動できるよう段階的に促している。
- 社会人としての基本的なルール、態度を身に付けられるよう指導するとともに、ロールモデルとして時間管理や言葉遣いなどに気を付けている。

方針３「柔軟で発展的な思考力」

- 学生がどうしてそのように考えたかを理由を大切にし、正答を求めるのではなく試行錯誤してより良い方法を考える豊かなアイデアを大切にしている。
- 授業や実習を通して、多くの住民と出会う機会を作り、多様な価値観と生活に触れて学生自身の価値観に気づき、視野を広げられるよう促している。
- 授業で得た知識や技術が実践場面でどのように活かせるのか、具体例を示すようにしている。
- 授業内容の改善・充実を図っている。

【成果・評価】

- 学生からの授業評価では良い評価が得られた。
- コロナ禍から少しずつ実習が可能な状況になり、学生に学ばせたいという思いから実習における荷重が大きくなりすぎており、整理が必要となっている。
- 公衆衛生看護学専攻科の学生の多くが保健師として就職し、それぞれの所属で活躍している。
- 学部の教育を行う中で、公衆絵性看護活動に興味を持ってもらい、進学に結び付いている。

【目標】

短期目標：

- 実習科目を整理し、実習として学ぶべき内容を実習施設と調整する。
- 学生が活発にグループワークやでジスカッションを行えるようサポートするとともに、学生個々の思考を深められるようしっかりとフィードバックを行う。
- 卒業生が集い情報交換や学びの場を企画する。

長期目標：3 年以内

- 保健師としてのアイデンティティを育て、現場でイキイキと活躍できる人材を育成する。
- 卒業後も継続して専門職業人としての成長を支援する。